

## 唱歌「故郷」はこうして作られた

市コミコンサートの締めくくりの歌といえば毎年唱歌「故郷」です。また、毎年9月初めに行なわれる「家族の絆」作文表彰式でも、最後の締めとして「故郷」を会場全員で歌いますし、その他いろんな場面で歌われていて、今や「故郷」は、まるで日本の国歌のような愛唱歌として定着しています。

さらに先日は、作詞者高野辰之に所縁の深い飯山市と大阪市が姉妹都市提携40周年記念として、飯山混声合唱団との交流を持ったばかりですので、恐らく「故郷」に対して関心をお持ちの方が多いと思います。

「故郷」については「リリオだより」6号『裏話「故郷」』（2012/6/5 発行）でも紹介しましたので重複するところがありますが、補足をしながら、もう一度この歌の作られた経緯を書いて見ました。

### 「♪志しを果たして いつの日にか帰らん～」

作詞者の高野辰之はまさにこの歌詞通り立身出世を果たし、故郷に錦を飾った人です。

辰之は、明治30年に長野県師範学校を卒業し、母校飯山高等小学校に赴任します。

飯山駅のほど近い所に「真宗寺」（浄土真宗本願寺派）という島崎藤村の小説「破戒」のモデルになったお寺がありますが、そこに彼は下宿をして小学校に通勤していました。

そのお寺には、鶴江さんという17歳の気品のあるお嬢さんがいました。22歳の辰之さんは彼女に惚れ込んで結婚を申し込みました。

すると鶴江さんの母親の井上よしえさんがこう言ったそうです。

「将来、人力車に乗って山門から入って来られるなら許してあげます」と。つまり将来出世することを条件に結婚を許すということです。



華麗に錦を飾った  
作詞者：高野辰之

（訂正） 「リリオだより」31号「朧月夜を深読みする」では、“「♪～蛙の鳴く音も鐘の音も～」の鐘の音は「真宝寺」の鐘で、その寺の三女鶴江さんを見そめて結婚します”と書きましたが、“「鐘の音」は「真宝寺」の鐘”は正しいのですが、鶴江さんは「真宝寺」ではなく「真宗寺」のお嬢さんでした。お詫びして訂正いたします。「真宝寺」は中野市にあります。

出世を条件に結婚を許された彼は、小学校教師を1年半で辞め、東京帝大教授で詩人の上田萬年先生を頼って上京します。明治31年9月のことです。

家や親の面倒を10歳下の弟に任せて、自分は出世のために東京へ……。

出世するなら東京へ行く、田舎にいてはウダツが上がらない、というのが当時の常識でした。

上京10年目、文部省の役人としてまだウダツのあがらない役所勤めをしていた辰之は、母親危篤の知らせを受けて帰郷しますが、「人力車で玄関に乗りつけるような男になれ」との義母からプレッシャーを感じながら、妻の里の「真宗寺」にも立ち寄っています。

その後、師範学校教諭、文部省小学校唱歌の編纂委員、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）教授となり、大正14年に「日本歌謡史」のテーマで東京帝国大学から「文学博士」の学位を授与されます。

そして人生五十年の節目でもあり「文学博士」を授与されたその大正14年、念願の故郷に華々しく錦を飾ります。

丸顔に口ひげをたくわえ、山高帽をかぶり、三つ揃えの背広にでっぷり出っ張った腹をして、約束通り人力車に乗って真宗寺の山門をくぐりました！

ええカッコですね！

その山門は、昭和27年の飯山大火のため、今はありませんが。

人力車に乗って偉い博士がやってくる、寺の婿さんがねえ！と町中の人が大勢見物にやってきたそうです。

でも唱歌「故郷」の作詞者であることは、その時はまだ誰も知りませんでした。

小学唱歌は文部省教科書編纂委員会で制定されたため、作詞・作曲者個人の名前が伏せられていました。作詞・作曲者が公開されたのは、昭和40年以降のことです。

彼は真宗寺を訪問する前、永江村（現中野市）の生家に立ち寄っています。  
JR 飯山線の飯山から二つ長野寄りに「替佐」という小さな駅がありますが、  
村人たちは総出で村から 4 Km も離れたこの駅に出迎えに来たそうです。

「♪志しを果たして いつの日にか帰らん～」というフレーズには、12 年前  
に義母井上よしえから言われた「人力車に乗って山門をくぐって帰ってきな  
さい」の一言が、辰之の心に如何に深く刻まれていたかを物語っています。

華々しく錦を飾った高野辰之に対して、作曲した岡  
野貞一はどんな人だったのでしょうか？

彼は明治 11 年、鳥取県邑美郡古市村（現鳥取市古市）  
に生まれました。高野辰之より 2 つ年下になります。

7 歳のとき父親を亡くし、貧困の中で 15 歳のとき故  
郷を捨て、クリスチャンだった姉を頼って岡山のキリ  
スト教会で育ち、クリスチャンとして洗礼を受けます。

東京音楽学校を卒業すると、本郷中央会堂という大きな  
そこで生涯を終えるまでの 40 年間、オルガン奏者を務める一方で、母校で教  
鞭をとっていました。

彼のご子息の岡野匡雄氏の話によると、父親はとても寡黙で、教会を通じて  
20 年以上もお付き合いした人でも、雑談を交わした記憶がないそうです。

また、東京音楽学校で岡野先生から声楽の授業を受けた鳥取大学名誉教授岩  
上行忍氏の話によると、不思議なことに音楽の先生でありながら生徒に一度も  
歌って聴かせたことがなかったそうです。

「次は何番の歌にします」と言って、ピアノでちょろちょろと弾いてから一  
斉に歌わせます。二曲、三曲と進んでいき、60 分経って終了時刻が来ると、「ハ  
イ、これまで」とおっしゃる、非常に単純な授業でした。

一人ずつ歌わせることもありましたが、先生は自分の主張というものを示さ  
れない。ここをこう歌えとは言われぬ。手帳に評価をメモして、それでおし  
まい。学生と雑談することも全くありませんでした。



寡黙で控えめだった  
作曲家：岡野貞一

このように寡黙、誠実、堅物で人付き合いの苦手な先生だったそうです。  
そんな寡黙な岡野貞一と華麗な高野辰之でどうして出会ったのでしょうか？  
明治 42 年 6 月 22 日、文部省が突如「小学唱歌教科書編纂委員会」が招集し  
ます。「文部省唱歌」を作って、日露戦争の戦勝気分で弛んでいる国民の心の  
ガタを唱歌で結びつけようという文部省の意図でした。

作曲委員は岡野貞一を含め 6 名、作詞委員は高野辰之を含め 4 名。

この委員会が高野・岡野の最初の出会いとなりました。

寡黙な岡野、華麗な高野の二人は、意気投合して熱い想いである名曲を作っ  
たのではないことは容易に想像できます。

当時はほとんど無名同士が偶然に協作することになったに過ぎない、その彼  
らには芸術家という意識はない。そのことが小学唱歌として分かりやすく歌い  
やすい曲を作ることに集中できた、と思われます。

よき職人として働いた結果からあの珠玉の歌が生れた、とそう考えます。

「故郷」のリズムは讃美歌の影響を強  
く受けている、というのが猪瀬直樹氏の  
見解です。

讃美歌第 475 番と「故郷」を比較すると、  
メロディーは違いますが、リズムは 8 小  
節まで完全に一致しています。

YouTube で聴いて見ると分かります。

パソコン画面を見ておられる方は、下  
の URL をクリックしてみてください。

<http://www.youtube.com/watch?v=SPOfKVxDa5Y>

岡野貞一がクリスチャンとして教会のオルガン奏者を務めていたことから、  
「故郷」が讃美歌の影響を受けている、と考えるのは自然なことかも知れま  
せん。

参考書：「唱歌誕生 ふるさとを創った男」猪瀬直樹著（小学館）

亀岡弘志（記）



「故郷」

讃美歌 475 番